

---

# 黄金と碧玉の娘

kakashi

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

黄金と碧玉の娘

### 【Nコード】

N3912Z

### 【作者名】

k a k a s h i

### 【あらすじ】

帝国の西に広がる山脈には、古代より連綿と続くアモル族の里が点在している。

古代アモルの血脈も年を経てうすれ、今では女兒に先祖がえりが生まれるだけとなっていたが・・・。

## 高原の民

帝国の西の山岳地帯には、冷涼な気候のもと美しい森が広がっている。

白い花が咲き乱れる美しい森。

山の中腹から裾野にかけては、古代から連綿と続くアモル族の生活圏であった。

古き人々の末裔アモル族。

彼らの総数は、10万人程度である。

アモル族の長を務めるエンハンス族、草原地帯で放牧を主に行っているティモル族、山から流れ来る大河に寄り添って暮らすロルガ族等、数千人単位の部族をまとめて、アモル族と呼ぶ。

山岳地帯の中央は盆地が開けており、アモルの有力な部族であるエンハンスの一族が大きな館を構えている。

エンハンスの族長の館は長大な石の壁に囲まれ、軒先にはアモル族最大の市場町が開けていた。

今日は、大規模な隊商がエンハンスの市を訪れる日である。

「ほう・・・」

エンハンス族一番の豪商であるカファの店に届けられたのは、夢のような品々。

カファが長の意を受け、特別に注文をしたものである。

「私でも、生まれてはじめてみるような品ですな」

カファ老人が、しみじみとため息を付いた。

帝国の贅を集めたようなきらびやかな宝石や布、繊細な小箱に詰め込まれた香料。

商人は品物のよさを誇張するように大きくうなずく。

「大公家の御用商人から、特別に取り寄せたものです。運搬には大変な気を使いまして、ハヴアルの傭兵隊を雇い入れました。」

ハヴアルの傭兵隊は、国を持たぬ先頭民族の成れの果てだ。

腕が立つ分、並ならぬ金がかかる。届いた品々は、彼らに警護させるほど高価な品なのだ。

「この碧玉。サラ八様の装いにぴったりではないかな・・・。」

カファ老人は、大きな碧玉を手に取り、覗き込んだ。

宝石は、荒く研磨された状態のまま持ち込んで、高貴な客の要望に沿って削りなおし、装飾品に仕立て上げるのが普通である。

しかしこの石は、田舎であるエンハンス族の街に持ち込まれることを考慮してか、美しい形に磨き上げてあった。

「おお、ちょうどサラ八様のお目のような色をしている。これで首飾りをお作りしたならば、どれほどサラ八様にお似合いになることか。」

商人が如才なく微笑んだ。

「サラ八様には暫くお目にかかっておりませんが、お美しくなられたことでしょう。」

「ええ」

カファは深々とうなずいた。

「あの方はアモルの女神の現身ですからな」

「アモルの女神？とは？」

「ああ、失礼。古代アモル族の先祖がえりのような美しい方を、年よりはそのように呼ぶのです。」

カファは微笑んで宝石をもう一度覗き込んだ。

「今ではめったに生まれませんなあ。とくに男の先祖がえりが生まれることはめったにないのです。ほとんどが娘なので、そう呼んでいるのですよ。」

石の検分を終え、カファは言った。

「ではこちらの品、サラハさまのご衣裳として、買い入れさせていただきます。」

## 黄金の髪の子

「商人が来たの?!」

目の前にぶら下がったすばらしい黄金色のみつあみに、エルフリードは驚いて顔を上げた。

エルフリードは新米の傭兵である。

兄のアロイセルと共にハヴアルの傭兵隊に入り3年。

隊商の護衛として、エンハンス族の族長館の市場に到着したばかりだ。

「何だあ?」

エルフリードが持たれかかった石段の上から、ほっそりした少女が覗き込んでいた。

それ自体が光を放つような純金の髪、色粉で染めたかのような鮮やかな青の瞳をしている。

「ね、市に商人が来たの?今日は何の市が立つの?インクや羽ペンが来た?」

きらめく色彩に包まれた少女が、矢継ぎ早にエルフリードに話しかける。

「何だよいきなり!」

「傭兵でしょ、商人と来たんでしょ?外から来た人?私と話してくれる?」

少女が身軽に石段から飛び降り、エルフリードに並んだ。

「何だよ……」

派手な目と髪の色だが、顔はかわいいな、とエルフリードは思った。自分よりも5つくらい年下だろうか。14、5の子供だった。

「私サラハって言います」

「……」

「名乗りなさいよ、騎士ではないの？」

黙りこくったエルフリードが気に入らないらしく、少女が頬を膨らませた。

「……」

子供の相手が面倒くさかったので、エルフリードはそっぽを向いた。酒でも飲むかと思っていたところだったのに……。

「ねえ、騎士が淑女に名乗らないなんて……」

「騎士じゃねえよ！」

思わず言い返してしまう。

帝国騎士だったこともあるが、あっという間に解雇された……とはいえなかった。

「なんだ、おまえ、えー」

「サラハです。」

「サラハちゃん、俺用事あるから行くわ。市にインクは来てねえよ。今日は宝石の日だよ！」

「待って！」

サラハがエルフリードの袖を細い指でつかんだ。

「お前、傭兵に何を……」

警戒心がない娘だ、とエルフリードは振り返った。ちょっと怒鳴ってやろうか。

「私と同じような目と髪の色をしているの、おどろいた。あなたと話したいの。」

サラハの真つ青な瞳が、色を深めてエルフリードを見返した。小さなかわいらしい顔が紅潮している。

「は？髪？金色の髪なんてごまんといえるんだけど……」

「だって同じでしょう!」

みつあみをエルフリードの目の前に突き出し、サラハは胸を張った。

「黄金を溶かした金、碧玉を埋めこんだ青、同じなの」

「はぁ・・・?」

ずいぶんとご大層な表現だ、とエルフリードはあきれ返った。

ただの金髪碧眼、アモル族には珍しくないのに・・・。

「へんな子だな・・・」

サラハの服装は、簡素な白茶布の服に、花の衣裳を縫いこんだ娘らしいベルト。

みつあみにした髪は若い娘らしく柔らかそうだ。

アモル族の素朴なかわいい娘にしか見えないのだが・・・。

都会から来た人間の気を引きたいだけなのかもしれない。

「ねえ、見て欲しいの、あなたの髪。」

エルフリードは、ひとつに束ねた自分の髪をつまんで、目の前に持ってきた。

母譲りの、黄金の髪・・・。

「まあ、似てるけどな・・・」

うんうん、とサラハはうなずく。

「目の色も同じよ」

「鏡なんてめったに見ねえから、わかんないよ」

色まで鮮やかに写るような鏡は珍しいし、そもそもそこまで自分の顔を眺め回すことなどエルフリードにはない。

「母ちゃんがアモル族の出なんだよ!」

面倒になって、エルフリードは声を荒げた。

「そうなの?」

サラハが顔を輝かせた。

「珍しくもないだろ!親父が帝国の人間で、母ちゃんがアモル族だ



つたんだ！

俺は母ちゃんに笑っちゃうほどそっくりなんだよ！」

何でこんな娘の相手をしてるんだろう・・・と、エルフリードはため息をついた。

「お母様はどうなさったの？」

サラハが身を乗り出した。

「死んだ。というより、何でお前、そんな俺のこと気にしてるの？」

「だって男の人で初めて見た、私のおばあちゃましか見たことなかった、この髪と目をした人を。」

サラハの小さな顔が輝く。

「はあ・・・」

なんか変な娘に絡まれちゃったな、とエルフリードは肩を落とした・・・。

外の人間が地元娘と話などをしてるせいだろうか。

周囲の目も厳しいように感じる。

「ほら、行っちゃえ、知らない男に話しかけたりするな。若い娘は家で刺繍でもしてるよ。」

エルフリードは手を振り、サラハを追い払おうとした。

「・・・はい。わかりました。もしよかったら、あとで父を尋ねてくださいね。」

サラハがようやくあきらめた様子を見せる。

「父？」

「はい。ボルド・エンハンス。エンハンスの族長です。あなたの髪と瞳を見たら、父も驚くと思う。ぜひあとで、館に来てください。」  
さようなら、と妙に律儀に頭を下げて、サラハは背を向けた。

「族長のお嬢様・・・？」

細い背中を見送りながら、もう一度つぶやく。

「あれがお嬢様かよ・・・」

大量の貴金属は、あの小さな少女のために運ばれてきたのか・・・。

## 兄と弟

「エル、待たせたな。給金は受け取ってきたから。何か食べるか。」  
兄のアロイセルの声で、ぼんやりしていたエルフリードは顔を上げた。

柔らかな淡い茶色の髪に、光の加減によっては緑色になる薄茶色の瞳をしている兄。

父親にそっくりで、エルフリードにはあまり似ていない。

「ああ、兄貴、お帰り……。」

「どうした？」

「うん、変な女に声をかけられた」

「またか。男前は辛いな。都では男にも女にも追い掛け回され、アモルの里でもまた追い回され、だな。」

アロイセルが苦笑した。

「いや、女っていつでも、ガキ。ちびっこいガキ。族長のお嬢様だつて言ってた」

「え、サラハお嬢様か？族長のお嬢様といたら一人しか居ない。」  
「知ってるの？」

「ああ、知っている。何でも古代アモル族の先祖がえりで、一族から掌中の珠として愛されてるらしいな。」

アロイセルが笑う。

「お前は知らなかったのか、一応、今日の隊商の積荷は、そのお嬢様のものらしいぞ。」

「あー、興味なくてなあ……。」

「俺は、そういう珍しい話を聞くと、頭に残ってしまうんだが。黄金と碧玉の娘か。どんな人だった？」

エルフリードは首をひねった。

「うーん……。俺とおんなじ金髪で、俺と同じ目の色してた。」

「へえ。じゃあお前は『黄金と碧玉の息子』だな……。」

「やめるよ・・・」

げんなりした弟を見て、アロイセルが笑い転げる。

「お前は俺と同じアモルの混血児だし、目の色が少し違うんだ、安心しろ。」

アロイセルは、弟の顎を押さえて、瞳を覗き込んだ。

「よく見るとさ、お前の目は奥のほうが薄い灰色がかっててるんだ。

完全な青じゃない。光の加減で変わるんだよ。サラハお嬢様は気づかなかったただろうけどね。」

「そうなんだ」

なんとなく、エルフリードはほっとした。

「お前が完全な先祖がえりだったら、アモルの年寄り連中に崇められて、ただで食事が運ばれてくる生活だったかもしれないな。きれいな服と装飾品で飾られて、神棚に座って拝まれる日々だ。

ただし、遊べないぞ。生き神様として、清廉潔白が求められる。酒なんてもつてのほかだ。」

「え、勘弁してよ!」

「冗談だよ。」

アロイセルが再び笑い転げた。

「ああ、可笑しい。お前単純だからな・・・」

アロイセルは、帝国の大学を出て、医学士の見習いをしていた優秀な兄である。博識なのも、学問をつんでいるからだ。

しかし、エルフリードが騎士団に入つてすぐ、男の上司に恋慕されて付きまとわれ、これを拒んで怪我をさせるという事件を起こした時に、アロイセルまで医学士の道をあきらめる羽目になってしまった。

エルフリードに恋慕した男は、有力な貴族でもある医学士の息子で、自慢の一人息子を傷つけられた父親が逆上したのである。

アロイセルは医学士として勤めていた病院を解雇され、エルフリー

ドモ

『同僚を傷つけたものは解雇』

という規定に従い、解雇された。

騎士団は貴族の子弟を守り、医学士会は貴族の顔色を伺ったのである。

エルフリードはそれから半年、ずっと荒れた気持ちですごしていた。兄には申し訳ないという言葉ではすまない。

往来で、足にすがってきた男を振り払わなければ……。

振り払った男が、石の角で顔を切り、大怪我をしなければ……。

屈託なく笑う兄の顔を見上げ、再び気持ちが重くなった。

兄はいつでも誰にでも優しいし、誰より賢い。

小さな隊商の護衛をして、安い酒を飲んで、平べったい寝台に転がって眠るような人間ではないのに。

「どうした？」

「なんでもない……」

「きれいな顔が台無しだぞ。せつかく母さんに似たのに。」

「こんな顔、何もいいことなかった。俺の内面には似合っていない顔だ。」

他人の心をもてあそんで楽しめる性格なら幸福だったし、他人の恋慕をさばくときにも失敗しなかったと思う。

しかし、エルフリードは兄と違って頭脳も平凡、性格も普通としか言いようがない男だった。

のんびり暮らして働いて、嫁でも貰えればよいと思っていた。

ただ母譲りの美しい顔と肢体だけが、おとなしい男に不釣り合いのきらびやかさで、逆にエルフリードを苛むものでもあった。

「まあ、とにかく飯でも食おう。アモル族の料理は、串焼きの肉に平たいパンが最高に美味だ。昔、薬学の研究で、別の一族の里に来たことがある。行こうか、エル」

兄はさばさばと言って、立ち上がった。

焼いた肉か、そういえばいいにおいがする。名物なのだろう。

エルフリードも空腹を覚えて兄に従った。

## 里の夜

「おや、サラハお嬢様」

老人の呼びかけに、サラハは振り返った。

エンハンスの一族ではいちばんの商人であるカファである。

「こんにちわ」

もうすぐ夕食時だというのに、何の用事だろう。

サラハはちよつと首をかしげる。

昔から知ってはいるが、カファが扱うものは高価な品ばかりだ。主に母の使いでしかやってこない。

子供のサラハには、あまり関係のない老人だった。

「お母様にご用事ですか？」

振り返って、目の前にそびえる父の館を見上げる。

母は確か、今晚は婦人の懇親会に出ているはずだった。

「私も今戻るところなのですが、母は確か、今は館におりません」

「いいえ、族長様にご用事なのですよ。」

如才ない感じの笑顔で、カファ老人は言った。

「ではご一緒しましょう。父は居りますので」

館の入り口を警備する男たちに軽く頭を下げ、サラハは重い扉の脇の通用口を開いた。

「申し訳ありませんが、こちらからお入りください。父は、カファさんにお約束させていただいていましたか？」

「ええ、お約束いただいております。」

サラハはうなずき、父の執務室の扉をたたいた。

「お父様、サラハです。途中でカファさんとお会いして、ご一緒いたしました。」

「入りなさい」

すぐに応えはあった。

カファが深々と頭を下げながら扉をくぐる。

「おお、カファ殿、夜分にご足労頂いてかたじけない。」

サラハの父は、アモル族らしいたくましい長身に、金褐色の髪と髭をした威丈夫である。

厳格な性格をしているが、今日の用事は気軽なものなのだろう。口調も明るかった。

「族長様、お久しぶりでございます。本日はお嬢様のためのお支度品をお持ちしました。」

生地類は刺繍に入っただけですので、本日は取り急ぎ石をお持ちいたしました。」

「どれ、拝見しよう」

父が身を持ち出すと、カファが卓上にいくつかの箱を並べた。

「こちらが碧玉、この大きさは、首飾りにお勧めいたします。周りに白瑞石を埋め込み、里の細工師に花をかたどった衣裳を作らせるつもりです。それからこちらは、帝国の工房で作られた、金を糸にして編んだ細工になります、そして・・・」

取り出される豪華な品々に、サラハは目を見張った。

父の許しさえ出れば、矢継ぎ早に聞きたいことが口から飛び出しそうだ。

「サラハもこちらに来なさい。お前のものだ。」

「は、はい！」

きらきらした宝物に見とれたまま、サラハも卓に歩み寄った。

「何ですか、これは・・・」

「今度、アモル族を挙げての大きな祭りがある。古代、この地を収めた女神に感謝をささげようという意図で開かれる祭りだ・・・まあ、当然それは建前だがな。お前には、碧玉と黄金の女神に扮して祭りの主役を務めてもらう。そのときの衣裳で使うものだ。」

「おまつり・・・ですか？」

「ああ、祭りを開く。エンハンス族は、アモルの長だ。新しい祭り



を開く権利を有している。

祭りを通して、アモル族の求心性を高め、もう一度一族を取りまとめたい。それが私の意図だ。

すべての部族から、何かしらの役務を提供させ、アモル族の文化を再確認する場を設けたい。

アモルの里に帝国の色が入りすぎるのは、好ましくないと私は考えている。それを払拭したい。」

きっぱりと言い切った父の威厳に、思わずサラハは身をすくめる。難しいことは分らないが、父はアモル族全体で、祭りを開くらしい。

その祭りに、古代人の先祖がえりであるサラハを出し、何か人目を集めるような仕事を命じようとしているのだろう。

「サラハ、カファ殿に装飾品や衣裳を発注してある。私が指示をしたら、衣装合わせに伺いなさい。下がってよい。」

サラハはあわてて頭を下げた。

一族すべてが、集まる祭り・・・？

森に籠り、一度も姿を見せない一族や、帝国と融和し、大きく開けた街に移住した一族も居る。

父は何をしようとしているのだろうか。

あの華やかな衣裳を、子供のサラハが着ておかしくないだろうか・・・。

サラハは、少しだけ不安を感じたが、あわてて打ち消した。  
偉大な父の言うことだ。娘は、ただ従わなくてはならない。

## 隠された刃

アロイセルは闇の中体を起こした。

山は冷える。夜着ではあつというまに体熱がうばわれていく。

「ロイ様」

眠っているものの耳には届かない、空気に溶けるような声が耳に届いた。

「起きている」

同じような声音で小さく答え、傍らの弟を見やる。

大きすぎる枕にうずもれた頭はピクリとも動かず、黄金の髪が敷布の上に渦巻いていた。

「弟君は・・・」

「薬を飲ませた。朝までは眠っているだろう・・・」

塗りつぶされるような暗さの中で、女の白い顔がぼうつと浮かび上がった。

「エンハンスの族長と、閣下との間でつなぎが取れたとの事です。

明日の朝、お一人でお尋ねいただけますか。」

「ああ・・・」

女が一步、歩み出た。

「ロイ様、ロイ様のような方が、あのような不名誉を帝国で蒙ってまで・・・」

寝台に女が腰掛けた。

足のほうに重みがかかる。

「ほかにも適役は居たでしょうに・・・ロイ様がなさる仕事ではないようにロゼは思います。」

「いい。納得の上だ・・・」

かぶっていたフードの襟元をかきあわせ、女が不満そうに唇を噛んだ。

正体不明の一族が、帝都の皇帝家に連なる貴人の命を狙い始めたのは、ここ数年の事だった。

これまで、襲撃は数回に及んでいる。

狙われているのは、アモル人の祖母を持つ、皇帝の遠縁の娘。高位の貴族の令嬢だ。

残された物証、仕留められた犯人の風体などから、アモル一族の、狂信的な一派の犯行だろうと目星はついてた……。

が、確証はない。

エンハンス一族は、アモルの長として、帝国として事を荒立てたくはないという立場を強く打ち出していた。帝国の属州となるのは不満だが、事を荒立てて生き延びられるとも考えていない。そういうことだった。

「なんとか手を打たねば……。ロゼ、俺はこの里に潜伏し、協力者との連携を育……。」

言い掛けたところに、白い手が重ねられた。

「ロイ様がいらっしゃらないのが寂しい……。」

「……。」

フードに包まれた頭が胸に寄せられた。

懐かしい、甘い香り。何度彼女と……。

「ロゼ」

硬い声で名を呼ぶと、はじかれたように女は顔を上げた。

「……失礼いたします。これで、閣下のところに戻ります……。」

小さな小さな音で扉が開き、気配が消えた。

ロゼは、「閣下」の密偵同士として知りあい、つかの間の関係を持ち、別れた女だった。

医学士の仮面をかぶり、「閣下」の下でどれほどの事柄に手を染めてきたか……。

弟に何も知らせず、やさしい兄の仮面をかぶり、忍ばせた短刀で「閣下」の敵対勢力を斬り、敵国の密偵を斬ってきた。父と同じ道だ。

帝国の低位の貴族として、貧しくもないが豊かでもない生活を送る人格者。それが父の表の顔……。

エルフリードの母は、アモル族の敵対勢力を始末しに行った父が、連れ帰ってきた女性だった。

小さな男の子を抱きしめ、がたがた震えていた。帝都ですら見たことがないほどに美しい女だった。

エルフリードは目に包帯を巻き、人形のように小さな頭を母親に預けていた……。

父は彼女を妻に迎えた。無駄なことはしない男だったが、美しさにほだされたのかもしれない。

新しい母になった女は優しかった。

生まれたときに母をなくしたアロイセルをとても可愛がってくれた。小さなアロイセルの心の中で、彼女が本当の母になった。

彼女の腕に抱かれていたエルフリードは、とても幼くて、ようやく乳離れしたくらいだった。

自分を兄だと教えたら、すぐに懐いた。言葉が増え、おにいちちゃん、というようになった。

「母親はもう居ないから、お前に兄弟は出来ない」

父にそう聞かされてそだったアロイセルは、とてもうれしかった。

だから、教えていない。

自分と母は親子ではないと。お前と父は血がつながっていないと。エルフリードは自分が守るべき子どもだと思ったのだ。

父も、アロイセルと同じ気持ちだったのだろう。

自分の「技能」は、アロイセルにだけ伝えた。危険な武器の扱いや、毒の扱い、暗号……。

母は体を壊していたのか、アロイセルが10歳、エルフリードが6歳のときに亡くなった。

父はその後再婚せず、アロイセルが18歳のときに亡くなった……。

うめき声を上げ、エルフリードが大きく寝返りを打った。

「え？」

ふと、声を出す。

「兄貴、起きてるの？」

「え……ああ……。」

『薬がもう切れた……？早すぎる。』

アロイセルは平静を装って答えた。

「水を飲んで戻ってきた。」

「水……。俺も、のどかわいたなあ……。なんだかすごくのどが渴いた……。」

のどを押さえ、流れ落ちる黄金の髪をかきあげる。

「水飲んでくるわ」

相当強い薬を飲ませたのに、エルフリードは平然とした足取りで部屋を出て行った。

『薬が効きにくい・・・？いや・・・それにしても・・・』

エルフリードは、そもそも病氣自体めつたにしない。

弟に薬を飲ませたことは、これまでほとんどなかった。

今夜は、相部屋しか取れなかったところに、ロゼとの連絡があり、仕方なく飲ませたのだが・・・。

アロイセルは腕を組む。

「アモルの、古代種・・・」

## 古代の血

「奴等は古代の血脈を持つ、といわれる人間を無差別に狙っている」  
エンハンスの族長、バファルが苦虫を噛み潰すような表情でアロイセルに告げた。

「あやつらの行動原理は『狂信』だ、話を通じる相手ではないだろう。」

エンハンスの族長たる私の制止ですら耳を貸さぬ。力不足、と思われる向きもあるうが、本当に話を通じぬのだ。

胸に抱く信念、正義という概念、すべてが常のアモルとは異なっておる・・・としか言えぬ。」

言いながら、バファルはアロイセルの華奢にすら見える体を、足の先から頭まで検分する。

「・・・失礼ながら、なにか武術の心得はおありか。」

アロイセルは苦笑した。

優男に見えること、それは相手の油断を誘うことだ。無駄な肉など付けず、常に人々にまぎれるように体を作れ。

アロイセルは父の教えを徹底している。

ちゃんばらなど、到底する気はない。その為に作った肉体だ。

「多少は。自分の身は守れるかと存じます。」

「そうか・・・。奴等は、孤立して武術を極めている一団だ。うかつによれば、斬られよう。腕のあるものを何人かつけるゆえ、奴等の元へ万一発たれる際は、わしにお声をかけられよ。」

バファルは、『頼りない』という認識を変えるつもりはないようだった。

アロイセルも、食い下がることの無為を感じ、話を本筋に戻すことにした。

「彼らが古代の血脈にこだわる、というのは、どのような意味があるのでしょうか・・・？」

「アモルの古代種は『神の力を持つ』と、奴等は思い込んでいる。カイアネの峰の奥深くに潜み、一族の名前を持たず、怪しげな巫女を祀り、ほかのアモルとは交わらずに暮らしている。

神の力を持つという古代人を集めて、何をしようとしているのかは・・・わからぬ。生きて戻されたものは居らぬ。」

「なるほど、狂信か・・・。」  
アロイセルはうなずいた。

「わが皇帝家の方々は、東の平野に暮らした古代のロウ・エメリイ族の直系と呼ばれております。アモルの古代種と、同年代に暮らした人々で、同じ黄金の髪、アモルとは異なる緑の眼をしていたと・・・。」

こたび狙われたのは、特にロウ・エメリイの特質を濃く備えた巫女姫エメルロウナ様です。」

エメルロウナとは、帝国の皇帝家の娘に与えられる名誉職だ。皇帝の血筋の中でも、古代種の血を濃く継いだ娘が選ばれる。

彼女は生涯のほとんどを神にささげ、大聖殿で暮らす。

聖人として遇される高貴な女性であり、彼女を守れない場合、帝国の威信に大きくかわるのだった。

「ところで、お嬢様はアモルの古代種の特質を備えていらっしゃるようですが、危険な目に合われたことはないのですか？」

「そうだな・・・幼いころ、一度奪われかけたことがある。だが、すんでのところでは阻止した。」

捕らえた下手人は、自害する死ぬ前に、サラハは見かけだけの木偶、女神の血にはあらず・・・と言い捨ておったのだ。

なにか、やつの目には満足いかぬ点があったのだろう・・・。

以降、サラハを狙うものは現れておらぬ。

親としては有難い限りだが・・・。」



だからといって、帝国の貴人を襲撃するなど論外だ、とバファルは肩を落とした。

疲れきつたしぐさで目をもむ。

「見かけだけの・・・木偶、ですか」

見た目で、何が分かったのだろう・・・？

「弟も、サラハさまとほぼ同じ目の色、髪の色をしています。おとりになるかと、連れてまいりました。」

「危険だぞ」

「分かっております。弟も、そこそ腕に覚えがある者、不覚は取らぬかと・・・」

「弟殿は、アモルの血筋か？」

「はい。母がアモル族でした。父は私と同じです。」

・・・本当は違う。エルフリードの父が誰なのは、アロイセルは知らない。

おそらくはアモル族の男なのだろうが・・・。

「それにしても・・・珍しいことだな。黄金と碧玉の特質を持つ男とは。男にはほとんど受け継がれぬはずだが。」

ただ、珍しいことではない。わしが幼いころ、近所の老人が、男ながらに黄金の髪、碧玉の髪を持って生まれたと言っておった。すでに白髪だったがな・・・。」

バファルは何かを思い出すように目を細めた。

「そうだな・・・今思えばおかしいことを言っておった。『自分は神になり損ねた』とか、何とか・・・。」

## 白の女

「うわあ今まで帝国にいたんだあ！すごいなあ、サラハさまと同じ髪の色、目の色だ！！」

長い髪をぐいぐい引つ張られて、エルフリードは悲鳴を上げた。

「いてえ！やめろ！やめろって！！！！」

「見せて！目を見せて！」

「顔を引つ張るな！！！」

エルフリードは町の広場で大歓迎を受けていた・・・

望んだ大歓迎ではない。

目立ちすぎる容姿のせいで、あっさりと人の注目を引き、「黄金と碧玉の若者がいる」と大騒ぎになったのだ。

「ちょっとおばあちゃん、拝まないで！何してんだよ・・・」

地面に伏して手を合わせる老婆を抱え起こして、エルフリードはぼりぼりと頭をかいた。

「有難いお姿じゃ、神となられるお方じゃ・・・」

「なれるわけねえって・・・何言っちゃってんの・・・ほら、やめておばあちゃん！」

ぐいっ！と髪をまた引つ張られる。

「きれいだなあー本当にきれい・・・染めてないんだよね？」

若い娘が三人がかりで髪の束を引いている。

「やめろー！抜ける！！」

「こんな色の染め粉ないよね、本物だよ」

「いいなあ、金の髪は若い娘の憧れなのよ、純金の色とあればなおさらよ！」

「なんで髪をこんな伸ばしたの？役者なの？」

エルフリードは髪を取り返ししながら答えた。

「俺の地元でも金髪は高く売れるんだ、皇帝様の髪の色に似ているから。だから伸ばして売ろうと思ってたんだよ！」

もう少し伸ばせば、ずいぶんな買値がつくはずである。

その金を兄に渡し、医学士の仕事で使う、高価な薬でも買って欲しかった。

「優しいのね」

騒がしい娘たちの声とは少し違う、柔らかだけれど血の通わない声が耳に忍び込んだ。

「え？」

違和感のある呼びかけに、エルフリードは辺りに目を走らせる。

「みんな、貴方みたいに優しくかった・・・懐かしいわ。」

声が遠のく。

『・・・誰だ？』

自分を取り囲んで好き放題に引つ張る手が邪魔だったが、エルフリードは立ち上がった。

何故だかわからないけれど、声の主を確かめておきたかった。

「・・・」

「どうしたの？」

娘の一人がエルフリードを見上げる。

「今、変な声しなかった？」

「変な声？」

娘が戸惑ったように、友人たちを見回した。

エルフリードの隣に腰掛けた老婆も、きょとんとした顔をしている。  
「変な声なんて、しなかった・・・よね？」

当惑した周囲の様子に嘘は見られない。

「・・・なんでも、ない・・・。」

ふと目を上げると、エルフリードを見物しに、何人かの男が連れ立ってやってくるところだった。

こちらを指差し、感心したような声を上げている。

『ああ・・・こんなに目立つなんて・・・もういやだ・・・』

エルフリードは腕組みをした。

しばらくして周囲が飽きたら、逃げよう。

目立ちたくないが、髪は良い状態で売りたいので切りたくないし、染めたくもない、どうしよう・・・。

「ねえ」

冷たい指が、エルフリードの腕に触れた。

「私と来て」

フードを目深にかぶった女が、そのままエルフリードの腕を引き、その場からひき離れた。

だれも声を上げず、追いかけてもこない。

何もおきなかったかのように、エルフリードの居ない空間をじっと眺めている。

『・・・え？』

ぞつとして、エルフリードは自分の手を引く女を見た。

女の衣から立ち上がる甘い柔らかな香りに、頭がしびれるようだ。

しばらく歩くと、人のいない小さな泉のほとりに出た。

エンハンス族の里は、たいていの場所に人の手が入っていたが、泉

の周りには人造物は何もない。

見たこともない、濃い緑の草と木々。水は澄み切っていて、池のその水草や小石が見える。

「ああ、みんな大はしゃぎだったわね……。楽しい。お祭りを思い出すわ。」

女がはらりとフードを落とすと、きらきら輝く銀系のような髪があふれ出した。

ほんのわずかに青色がかった銀の瞳に、真っ白な肌をしている。この世のものとは思えぬ、色のない美しい女だった。

「よく顔を見せて」

白い指が、エルフリードの頬に触れる。指の形から小さな爪まで、全てが作り物のように整っている。

銀の睫が、淡い青の瞳に影を落とし、光をはじく。

「あんた……。誰……。」

「カナシャという名前を親から貰ったわ……。貴方はマイラの息子？」

「え……。」

何故母の名を知っているのか……。といいかけると、カナシャがにっこりと笑った。

「やつぱり。そっくりだね。マイラは元気？」

「いや……。死んだ……。けど……。」

エルフリードの答えに、カナシャが悲しげに目を落とした。

「死んだ……。？もうそんなに経ったかしら……。？マイラが里を出て、何十年くらいかしら……。」

白く輝く銀系の髪がさらさらと風に揺れた。

「話がしたくて」

「え？」

「貴方と話がしたくて。ねえ見て、泉の底、きれいな石があるわ」  
操られるように、エルフリードは泉を覗き込んだ。

黄金と白銀の影が、水面に映る……。

「きれい、透き通った石……私、あの紫のが欲しいな……。」  
甘えるように唇の前にこぶしを持ってくるしぐさが、思いがけなく少女めいていた。

「ああ、取ってきてあげるよ……。」

頭のどこかがしびれたまま、エルフリードは靴を脱ぎ、白い足を泉に浸す。

見たままの冷たさが心地よかった。

紫の石は、浅いところにいくつも転がっている。

エルフリードは水に手を浸し、拾い上げた。

「取れたよ……。」

ほとりに立つ女に、石を手渡そうとして……止まった。

風になびく黄金の髪、染め上げたように鮮やかな青い瞳の女が、同じように手を差し出している。

女の目からはぼろぼろと涙がこぼれていた。

「ああ……なんて懐かしいの……兄さん、父さん、カヤル、一族の男たち、貴方を見ているとみんなを思い出す」

「え……？」

「みんな優しくかった、貴方みたいに、すぐに優しさを差し出した」  
「……何が……。」

女が手を伸ばし、紫の石を受け取った。

この金の髪の女は、先ほど「カナシャ」と名乗った銀髪の人物に違いない。だけど、今は……。

「どうして、今頃・・・ねえ貴方はどうして今来たの・・・」  
泉に立つエルフリードに、女がしがみついた。

ばしゃん、と大きな水音が響き、衣の裾が水面に浮く。

「懐かしい、懐かしい・・・」

顔を上げたカナシャの顔が、息がかかるほど近くにあった。  
涙が流れることに、カナシャの瞳の青が濃淡を変える。

「私、決めた」

不意に、どんつ、とすさまじい力で突き飛ばされる。

ごぼごぼ、という水音、ゆがむ視界の中で舞い踊る黄金の糸、水面  
を通して差し込む、日の光・・・

『・・・！』

エルフリードはあわてて水をかいた。

「・・・っはああ！！！！」

水面に躍り出て、滴り落ちる水をぬぐい・・・われに返った。

喧騒・・・？

さっきの森の泉じゃない・・・？

広場の噴水からエルフリードは顔を出していて、周りの人間があき  
れたようにこちらを見ていた。

## 兄の仕事

「エル、何で噴水で泳いだの・・・？」

あきれ果てたように兄が腕組みした。

「いや、泳ぐつもりはなかったというか・・・たぶん落ちた・・・」  
言葉を濁す。

ものすごい美人と会った。美しい作り物のような女。

その女の髪の色が変わって、泉に突き落とされたと思ったら噴水だった・・・

『よそう、頭がおかしいのはたぶん俺だ・・・』

エルフリードは整合性のあわない話を飲み込み、鼻をかいてみせた。

「周りの奴等が髪の色が、目の色がってはしゃいでさー、弾みで誰かに突き落とされたんだ」

そうだ、これなら話を通る。

「なんだ、この石」

アロイセルが、ぬれて絡まった黄金の髪から、何かを摘み取った。

「きれいだな。」

紫色の、透き通った石。

「なんだろう？見たことがないな・・・紫水晶にしては色が均一だ。噴水の底に落ちていたのかな。」

アロイセルの指の間で、紫の石がきらりと光る。

「持っていて」

ふと、女の声が耳に忍び込んだ。

「えー」

あわてて振り返る。



ここは、宿の部屋だ。アロイセルしか居ないはず・・・  
「どうした？」

アロイセルが茶褐色の目を不思議そうに見開いている。  
「いや・・・何でも・・・」

カナシャが居るわけがない・・・。

「また、会いに行く」

また、女の声・・・。

エルフリードは部屋中をぐるりと見渡し、窓に駆け寄った。  
窓の外には、にぎやかな町並みが広がっている。  
女の姿はなかった。

「エル・・・どうした。風邪を引くぞ」

兄の声でわれに返った。

「兄貴、石・・・貸して」

「お前のなのか？」

アロイセルは、つまんでいた石をエルフリードの手のひらに置いた。  
「大事なものならなくすなよ。落とさなくて、良かったな。」

エルフリードは石に目を落とした。

この石から声が聞こえたような気がする・・・

でも、そのはずはない。自分がおかしくなったのか。環境の変化で  
疲れているのか。

カナシャは、本当に居たのか・・・。

「とりあえず着替えなさい。ずぶぬれなんだから。」

兄に言われ、エルフリードは張り付く上着を剥ぎ取った。

「ねえ兄貴・・・」

「なんだ？」

「俺、髪染めようかな・・・あのサラハとかいうお嬢様と一緒にの色だと、目立つんだよね・・・」

「ああ、『黄金と碧玉の娘』か。」

アロイセルは笑い出した。

「じつは、俺ははじめから知っていた。アモルの里で、お前が目立って引つ張りだになることも予想がついていたよ。」

あっけらかんと言うアロイセルの態度に、エルフリードは思わず片頬をゆがめる。

「兄貴ー！なんだよそれ！」

「面白いから黙っていたんだ」

細い体を折り曲げるようにして、アロイセルが笑う。

何の屈託もない笑顔。

兄はいつも悪気がなくて、純粹だとエルフリードは思う。

「ええ！いやだよ、つつきまわされるのは・・・」

「お前、ぼんやりしているから、話しかけやすいんだ、きっと」

アロイセルはようやく笑い納めた、というように涙をぬぐった。

「人気者になれてよかったな。」

兄のせりふに、それはあまりに俺の気持ちを分かっていないと、エルフリードは心底ふてくされた。

髪を引つ張られたり、目をひん剥かれるのは痛いのだ。

「ところでエル、俺は早速仕事を見つけたぞ」

アロイセルが指を立てて、自分の胸をさす。自信に満ちたしぐさ。

「族長殿のところで、アモルの里人に対して、医学士としていろいろご相談に乗ることになった。しばらくは仕事するから。お前も、何か日銭くらいは稼いでくれな。」

「おお！」

エルフリードは目を輝かせた。

兄は、医学士として本当に優秀で、本当に格好いいのだ。

胸がはずみ、着替えをやめて兄に歩み寄る。

「良かった、兄ちゃん・・・！良いじゃないか、兄ちゃんなら絶対役に立つよ！」

最近は避けていた、子供じみた呼び方になっていることにも気づかないほど、心が浮き立つ。

「俺のせいで、仕事なくしちゃったから・・・気にしてた。良かったな・・・」

情けないことに、涙まで少しにじんだ。

「はは・・・勘が鈍ってないと良いけどな。」

一瞬、寂しそうな顔をした後、アロイセルは顔中に笑みを広げた。

「まあ、がんばってくるよ。ありがとう。」

くしゃ、と、湿って束になった髪をなでられ、エルフリードは情けない顔を隠そうと少しうつむいた。

## アトリンゼの看板男

エンハンスの里の辻にある、比較的大きな雑貨店アトリンゼ。今日から目立つ男が会計係として雇われている。

「あ、あの、く、果物、こ、これください！」

耳まで真っ赤になった少女が、かごに詰め込んだ果物を差し出す。

「え、駄目だよこんなにぎゅうぎゅうに詰めちゃ・・・果物つぶれるだろ」

エルフリードは、かごから崩れないようにそつと商品を引っ張り出した。

「えーと、31デйнаになります。」

暗算はすぐになれた。適応が早いことだけは多少誇れるのだ。

「ああああああありがとうございました！」

真っ赤になったまま、少女がじりじりと後ずさりする。

「・・・大丈夫？」

エルフリードの問いかけに、ぶんぶんぶんと頭を振り、くるりと背を向け、一目散に走り去る。

「・・・転ばないでね・・・。」

少女の姿を見送って、行列で笑い声が上がった。

「いやあ、色男、すごいねえ。娘さん一目ぼれじゃないの？」

中年の男のからかい言葉に、エルフリードは思いつきり顔をしかめた。

「そんなことねーよ・・・ないですよ！珍しいんじゃないの、俺の髪とか。」

はらはらと落ちかかる黄金の髪を結いなおし、エルフリードは次の会計商品を受け取った。

「えーと、56デйнаです。この干し肉は古いから値引き、1デйна引いてありますからねー。」

自分でもあきれるほどに、雑貨店の会計係が水に合った。

騎士団で働いたときはこれぞ天職、剣技をきわめる、などと思ったものだが、今はこれが一番向いた仕事だと感じられる。

要するに、与えられた仕事に満足して、愚直にがんばる・・・というような生き方が向いているエルフリードである。ど派手な顔にはまったく見合わぬ良い資質であった。

「卵入ってるから落とさないでくださいね！」

ぼおとした顔でエルフリードを見つめる妙齡のご婦人にうすい紙袋を手渡す。

袋詰めもお手の物になってきた。固いものは下、卵は一番上。

「はい、お次の方ー！」

会計台の前に立ったのは、顔に向こう傷のある男だった。傷のある胸覆いをつけ、平凡な街人とは少し違った雰囲気をかもし出している。

髪の色は金茶で、瞳は暗い青。アモル人のようだった。

「煙草を1本」

煙草は、湿気やすい貴重品なので、会計係が紙巻をしてすぐにその場で手渡す必要がある。

エルフリードは、器用に専用の紙を取り出し、くるくるときれいに巻き上げた。

「どうぞ、5デйнаです。」

ちやり、と、銅貨が台の上に投げ出された。

「・・・思った以上にお美しい方ですね。うわさをお聞きして、伺ってよかった」

「え？」

男に言われるのは、気色悪い・・・とエルフリードが眉をひそめた瞬間、男は人を押しのけて姿を消した。

「・・・。」

なんだろう、肌がべたつくような不快感。男に迫られたことは何度もあるが、それともまた違う・・・

そう、湿った石壁のような不快感が・・・

「お兄さん！」

からつとした声に呼ばれ、あわてて愛想笑いを浮かべる。

「すみません、ぼうつとして！」

「なんだろうねー、今の人怖いね！」

人のよさそうな中年女性が、男の消えたほうを振り返りながら眉をしかめた。

怖い・・・そう、怖い。

エルフリードは中年女性の言葉に納得する。

なんだか、気味が悪い、のだ・・・。

「何でしょうね、からかわれましたね。」

軽く言つてのけて、次のかごを受け取る。

ざつと目を通すと、合計の金額と、割引する必要がある額がすぐに浮かんだ。

「44デйнаです。この木の実、傷が入ってるから2個で10デйнаにしときますね」

「計算速いねえ」

驚いたように言う女性に、にっこりと笑い返す。お愛想には、お愛想だ。

「ありがとうございます。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3912z/>

---

黄金と碧玉の娘

2011年12月26日20時46分発行